

悪魔はいる

波田野 淳紘

登場人物

男（生島）
朝子
アカネ
広田
木村
谷本
エミリ
テルミ
高橋
正造

ある地方都市。廃ビルの一室。

すべてがくたびれていた。壁も、天井も、汗をかいたように、静かに湿っている。

何かのゆっくりと傾く音が、沈黙の内に響いている。

循環が滞っている。

—

中央のテーブルに、三人の男女。彼らは小さな出版社の社員たちだ。

少し離れたところで、正造がひとり、机に突っ伏して眠っている。

彼の周りには酒瓶が散らかっている。

室内は疲弊に色濃く包まれている。

アカネ わたしたちは何とたたかっているか、それが問題ね。

広田 たたかっている？

アカネ 相手が具体的なかたちを取って目の前に現れるなら楽だけど、そうじゃない。姿が見えない。

広田 毎日かかってくるじゃないか、電話が。

アカネ あの人たちは、敵なの？

広田 そうだろ？ おれが何度殺害予告を受けたと思う？

アカネ でも、あの人たちとどうたたかえばいいの？

広田 通報する。

アカネ 何が変わるの、それで？ ああ、違うの、わたしはうまく話をできていない……。

広田 (ぐったりとして) わかるよ。

アカネ あの人たちの言葉……。そう、あの言葉たち。同じ人間として扱われないというところが、こんなに消耗することだって知らなかった。

広田 「そんなに日本人が嫌いか」「嘘ばかりつけやボケ」「スパイどもを叩きだせ」よくもまあ、なめらかに出てくる……。

アカネ どうしてあんなに話を通じないの？ いったい何がそうさせているの？

広田 それは向こうの問題だ。

アカネ その問題とたたかわなければ、何も変わらないとわたしは思う。

広田 何て難しいことを言いだすんだ。木村さんなんて、さっきから黙りこんじゃってるじゃないの。

木村 すみません。

アカネ あちこちの図書館に電話してるらしいの、うちで出した本を置くなって。

広田 もはやカルトだね。

アカネ 絵本も。今江さんの本も。何もかも有害だから、廃棄しろって。

広田 木村さん、コメントは。

木村　なんて言ったらいいか……。

アカネ　悪意ではないのよ、善意でそれをしているの。

広田　それで、実際捨てられたのか？

アカネ　（首をふり）書庫にしまわれるだけ。一日何十件と電話が来るらしいから。

広田　そのうち、本をびりびりに破くやつが出て来るよ。

アカネ　その報告は受けたよ。

広田　……新聞沙汰じゃないか。

アカネ　こどもがそれ借りて泣きだしたって。

木村　絵本を？

アカネ　（頷き）出版社が同じならすべて攻撃の対象。

木村　くそやろうですね。

アカネ　……ほんとにね。

広田　そのくそやろうが全国にいるってことか。

アカネ　もう一冊出したら、エスカレートするかもしれない。

広田　確実にするだろ。

アカネ　わたしたちは、どうたたかえばいいの？

広田　屈しないことだよ。

アカネ　社長もそう言った。

広田　そりゃ朝子さんはそうだよ。血が騒ぐんだろ。（奥のドアを示して）あの人も
匿ってるくらいだから。

木村　寝てるんですか？

広田　（正造を見て）昨日も遅くまで飲んでたからさ、こいつと。軟禁状態みたいな
ものだしな。21世紀の日本で、軟禁生活を送ってる……。

アカネ　うちみたいな弱小出版社、潰れるときは一瞬でしょ。書店で本を扱ってもら
えなくなったらどうする？　わたしたちはどうやって生活をしていく？

広田　出さないっていうのか、次の本。

アカネ　出すよ。

広田　……。

アカネ　覚悟だけ決めておいてね、っていうこと。

広田　いかがです、木村さん。

木村　あたし、入社したのは、こんなことをするためじゃありません。

アカネ　知ってる。

広田　児童文学とはかけ離れてるもんな、いまの路線は。

アカネ　じゃ、どうするの？

木村　どうするも何も、

アカネ　ごめんね、申し訳ないけど、辞めるならいまだよ。止めないから、誰も。

広田　おれが止めるぞ。困るよ、ただでさえ人がいないのに。

アカネ　そういうことはいいから。好きにしていいいから。

木村　（腕時計を見て）時間です。

アカネ　時間？

木村 爆破されたでしようか、いまごろ。

広田 まさか。百パーセントないね。

木村 そうですか？

広田 何度予告が来た？ 一度でも予告通りのことが起こったか？

アカネ 何もないといいけど。

広田 あるわけがないさ。

アカネ 本は破かれたよ。

広田 ……。

アカネ 日々の業務もままならない。現実には、わたしたちはこんなところにいる。完
敗じゃない？

広田 戦略的撤退だな。

谷本とエミリがやってくる。

谷本 おはようございます。

広田 たにもっちゃん。尾けられてないだらな？

谷本 何ですか？

広田 行ったり来たり、ちゃんと複雑なルートをたどってきたか？

谷本 駅からまっすぐ来ちゃいました。

エミリ 饅えたようなにおい、しません？

アカネ そう？

エミリ カビ？ 何かこびりついてる……。

谷本 気のせいだろ。

広田 おまえの鼻毛だよ、におってるのは。

エミリ あ、鼻毛か。

アカネ (室内を見回して) 雰囲気はあるけどね。キャバレー？

広田 ま、夜のお店だな。

木村 違法だったらしいですよ。

谷本 違法？

広田 誰から？

木村 正造さんから。オーナーさんが裁判かけて業者を追いだしたって。

谷本 違法、かア……。

広田 あ、何想像してんだろう、この人は。

谷本 してませんよ。

アカネ 壁も床も黒光りして……、染みこんでいるね、いろいろ。

谷本 その言い方……。

エミリ におうけどな、やつぱり。

広田 この界限は昔から、いかがわしい街だったよ、いまよりずっと。ずいぶん滅菌
されちやっただけだな。

エミリ いてえ。

広田 な、何。

エミリ は、鼻毛が……。

アカネ 見せないで。

木村 昨日、話をしたんです。

谷本 話？

木村 (奥のドアを示して) 生島さんと。

広田 何の話？

木村 他愛のない話。これからどうするか、とか。似てるんですね、その人の書いたものと、本人って。

広田 あの人が？ ぜんぜん違くないか？

谷本 正造さん、大丈夫ですかこれ、死んでませんか？

木村 何か、わくわくします。

アカネ わくわく？

木村 わたし、普通だったから。ずっと普通だったから。世の中に背を向けて、懸命に、公平に真実を追求するっていうか。その姿勢。

谷本 何の話？

木村 わたし、辞めません。

アカネ ……そう。

谷本 木村さんだめだよ、何思い詰めてんの……。三年は続けてみようよ。

アカネ 谷本くん、だから辞めないって、木村さん。

谷本 そうだとしてもですよ、水臭いですよ、何も言ってくれないのは。

アカネ だからさ……。 (木村に) いいや、まかせた。

木村 続けますよ、わたし。

谷本 いまはね、こんな状況かもしれませんが、未来はあると思うんです、間違ったこと何もしてないでしょう、ぼくたちは。

エミリ 熱いな、この人。

谷本 いい本、つくりましょうよ。ねっ。ねっ。

広田 ここにいと、楽だよな。電話もない。来訪者もない。ひっそり移転しちゃおうか。

エミリ 賛成。

谷本 なんで？

エミリ 気分転換？

広田 一ヶ月だ。まずは一ヶ月、ふんばろう。続けていけばいいんだ。いつかは潮が引く。あつという間に忘れ去られる。そうだろう？ 続けていくんだ。大事なのはそれだけだ。

正造がむくりと起きる。

正造 朝ですか？

谷本 わっ。

広田 夕方だよ、もう。

正造 え？ほんとに？

谷本 死んだように眠ってましたよ。

正造 なんだ……、むだにしちやっとな、一日。

アカネ 朝よ。

正造 朝ですか？

広田 え、きみ、寝てたのかほんとに？ 突然すぎないか、いまの起き方。

正造 (答えず) にぎやかでいいな。目が覚めたらみんないた。

アカネ 何時まで飲んだの？

正造 さあ……、はつきりしません。

木村 そんな境目のない生活、いつまでも続けてられないよ。

正造 えへへ。

木村 わかってるのかな、この人……。

木村、正造と仲のいい様子。

周囲は不思議に思いながら眺めている。

谷本 (エミリに) 何か、入れろよ、飲み物。コーヒーを。

エミリ わたし？

木村 あ、わたしが、

谷本 いいんですよ、木村さんは。

広田 (谷本に) おまえが入れるよ。

谷本 ぼくですか？ (きっぱりと) やめたほうがいい。

広田 (のけぞり) わけがわからないよ。

谷本 違うんですよ、うまいんですよ、こいつ、コーヒー入れるのが。腕を持ってるんです。飲んでみてくださいさいよ、ぜひ。

アカネ お湯沸かして粉混ぜるだけでしょ？

谷本 そうだとはいえ！ 何かが完璧に違うんだ。飲めばわかる。

エミリ いくつ……？

アカネ あたらしい。

広田 じゃ、飲みます。

谷本 人数分ね、人数分。

正造 よし、ぼくも手伝おう。

谷本 あんた、手伝ったら意味ないでしょうよ。

正造とエミリと谷本、キッチンの方へ。

「お湯の沸かし方にも秘密が」「普通ですから」「このヤカン使っているの？」「にぎやかな声が続く。

広田 あれがきみの先輩だぜ。

木村 はい。

アカネ はしやげるだけマシじゃない。

広田 あれで、作家には愛されてるよ。考えられないでしょう、前にいたところじゃ。

木村 いえ……。

広田 なんていうか、手作りだからねうちは、良くも悪くも。その分、やりたいことをやっていい。

木村 はい……。

アカネ 生島さんの原稿は進んでいるのかな？

広田 あれ、仕事の話？

アカネ やることないから。できることから一つずつ。

広田 進んでいません。

アカネ なんで。

広田 しょんぼりしちゃってるのよ、生島さん。わかってやってよ。

アカネ わかってるわよ。

広田 自分のせいだと思って、この状況を。

アカネ それを、ああだこうだ言って、心の重荷を解くのがあんたの仕事でしょ。

広田 テルミさんがいるから、おれは……。

木村 テルミさん？

アカネ 昨日会わなかった？ 生島さんの……、何よあれ、彼女？

広田 そのようなものだろう。

アカネ だめよ、そのようなものに任せちゃ。

広田 作家っていうのはな、心を許せる存在をぜったいどこかに用意しておくんだ。それが用意できない作家は、作家でいられない。

アカネ 誰の受け売り？

アカネの携帯電話が震える。

アカネ (携帯電話の表示板を見て) 朝子さんだ。もしかして？

広田 だから生島さんのことは彼女に任せときゃいいの。

アカネ はい、いま……。はい？

広田 おれが何言ったってプレッシャー与えるだけで……。

アカネ、「え？」とくり返し聞きながら、部屋の隅へ。

木村 为什么呢？

広田 ああ、お金でも落ちてないかな、ちくしょ……。

アカネ、戻ってきて、

アカネ 爆破されたそうよ。

広田 何だって？

アカネ 本当に爆破されたそうよ。

広田 爆破？

アカネ わたしたちの事務所。

木村 予告通りに？

アカネ フロアが吹っ飛んだって。

木村 ……。

広田 ……。

アカネ 人がいたら確実に死んでいたって。

と、三人、カップを盆に載せてやってくる。

谷本 さ！ 入りました！ 入りましたからね！

正造 (すでに飲みながら) おいしいね。

谷本 一っだけね、正造さんが入れたものがあるんです。わかるかな？

カップを並べはじめ。エミリが手にしたカップを、

谷本 それそれ、おれのマイカップ。このしるし見て、これ。

エミリ これ？

谷本 いつも使ってるだろ？ きみ、ほんとに普段何見てるんだい？

広田 行こう。

谷本 はい？

アカネ 行っとうするの？

広田 どうするのじゃないよ、社長一人なんだから、いま……。

谷本 何ですか？

広田 え、人が死ぬって？ どのくらいの規模？

アカネ わからない。

木村 資料は？ ほとんど置きっぱなし……。

谷本 待ってください、何ですか？

広田 爆破だよ。

谷本 爆破？

広田 爆破！ 会社が！

アカネ 吹っ飛んだそうよ、予告通り。

谷本 え？ それ、どういう……。

広田 うん、どういうことなんだろう。

アカネ そういうことでしょ？

広田 どういうことになるんだろう。

エミリがふいに笑いはじめた。

木村 エミリさん？

エミリ すいません、何かちよつと、笑っちゃう、爆破って……。

谷本 え、爆破って、されるものなんですか、ほんとに？

広田 おう。されたよ。

木村 急ぎませんか？

アカネ (エミリに) 留守番してて。お願いね、ここ。

谷本 そんなことってあるんですか？

木村 だって、そうなんだっていうから。

広田 どうにもならんよ、実際見てみないことには……。